原著論文

親の心理的特徴に着目した児童虐待のリスクアセスメント項目リストの検討

寺井孝弘[1§]

概　要

児童虐待は喫緊の課題とされており，親子に関わる機会のある医療者は，早期に虐待状況を捉え，支援が必要な親を把握していく必要性がある．そのためには，リスクアセスメントのツールが必要と考え，親の心理的特徴を項目とした虐待のリスクアセスメント項目リストの作成を試みた．項目リストは，先行研究で報告されている虐待状況に曝された者が呈する心理的特徴を参考に，虐待に陥る親の心理的特徴として独自に作成した．この項目リストを虐待事例に関わる児童相談所等で勤務する専門家に調査し，項目内容が虐待事例にどの程度合致するか，項目内容（心理的特徴）を親との数回の関わりで気がつけるかという観点から検討した．最終的には31項目に集約され，今回作成した項目リストが虐待に陥った親の心理的特徴を表すものであることを専門家の意見で根拠づけた．

キーワード　親，虐待，心理的特徴，項目リスト，専門家

1．はじめに

子ども虐待は，子どもの心身の成長や人格の形成に重大な影響を与えるとともに，次世代に引き継がれるおそれもあるものであり，子どもに対する重大な権利侵害である．虐待された子どもへの影響としては，骨折や熱傷など様々な身体的障害のみならず，虐待状況に曝され続けることによる心的外傷から情緒不安定などの様々な精神症状を呈することがある．また，安定した愛着関係の経験ができないことによる対人関係障害，自己評価の低さ（自尊心の欠如）などもある[1)]．このような影響の大きい虐待への援助に際して，子ども虐待は身体的，精神的，社会的，経済的等の要因が複雑に絡み合って起こるという点を考慮する必要があり，一時点における助言や注意，あるいは経過観察だけでは改善が望みにくいということを常に意識しておかなければならない．放置すれば循環的に事態が悪化・膠着化するのが通常であり，積極的な援助を展開していくことが重要である[2)]．特に近年は，核家族化や少子化等の家族形態の変化や地域社会との関係の希薄化による子育てを取り巻く環境の変化もあり，虐待は特別な家庭の問題という認識で取り組むのではなく，どの家庭にも起こりうるものとして捉えられるようになっている．保健・医療・福祉に携わる者は，このような認識に立ち，子どもを持つ全ての親を念頭に置いて，子ども虐待予防の取り組みを進めていく必要がある[3,4)]．そのためには，これまで様々な実態調査を通して抽出された虐待に至るおそれのある要因[5-13)]（リスク要因）に着目し，それらの要因を持ち，支援を必要としている家庭であるかどうかを判断し，早期に支援につなげることが大切である．ここでいうリスク要因とは，親側の要因，子側の要因，養育環境の要因に大別され，親側の要因には親自身の性格や精神疾患等の身体的・精神的に不健康な状態に起因するもの等があり，子側の要因は，低出生体重児，障がい児など何らかの育てにくさを持っている子ども等，養育環境の要因は，夫婦の不和や配偶者からの暴力等不安定な状況にある家庭が挙げられる[2)]．また，児童虐待の加害者の要因の中で最も注目すべきは「認知の歪み」である[14)]と言われるように，上記の3要因の中でも特に親の要因（心理的特徴）に着目することは，虐待のリスクアセスメント項目を作成していく上で有用である．

以上のように，虐待は様々なリスク要因が絡み合う中で発生すること，虐待状況が悪化・膠着化する前の段階で支援の必要な家庭を把握することが重要であり，多くの一般家庭から虐待リスクのある家庭を把握していくためのリスクアセスメント指標が必要であると考えた．そこで，本研究で

[1] 石川県立看護大学

は，虐待のリスクアセスメント項目リストを虐待リスク要因の中の親側の要因（心理的特徴）に着目して作成すること，さらに虐待事例と関わる専門家に調査を実施し，項目リストの内容が虐待事例の特徴とどの程度一致しているか，項目内容を把握する際の把握の容易さについて検討した．

２．方法

２．１　虐待のリスクアセスメント項目リストの作成

虐待リスクのある親に気づき，支援していこうとする試みとして，様々なリストを用いてリスクアセスメントが行なわれている．現厚生労働省子ども虐待対応の手引き[6]に記載されている，子ども虐待評価チェックリストは，項目として「絶え間なく子どもを叱る・罵る」,「泣いてもあやさない」等が挙げられており，明らかに重篤な虐待を想定し設定されたものである．また，保健分野の乳幼児虐待リスクアセスメントでは,項目に「親の精神障害」,「子どもの発達の遅れや問題」等があり，やはり重度の虐待を想定したリスト，あるいは発達の遅れ等の虐待による悪影響が子どもに表れた事例にしか気づけないリストであるといえる．上記以外のリスクアセスメント[8-13]には，比較的軽微なものや気づきにくいものに対する意識の高まりが感じられるが，身体的虐待やネグレクト等のさまざまなタイプの虐待を広く見るものが多い．そこで，虐待予防の重要性を考え，比較的軽微なものも含めた虐待のリスクアセスメントをより敏感に行なうためのツールが必要であると考えた．そのためには，親の心理的特徴の機微を丁寧にアセスメントできる指標の作成が必要である．

２．２　虐待リスクのある親の心理的特徴

虐待のリスクアセスメントの項目リストを考えるにあたり，多くの虐待の事例報告や総説に記載されている，子ども時代に虐待を受けた者に共通すると思われる特徴に着目した．後述する概念も含めた先行研究[2,3,5-22]を参考として，虐待リスクに関連すると考えられる心理的特徴をブレーンストーミングの形式で研究者と児童虐待に精通している小児看護学領域の教授で書き出し，項目リスト案を作成した．その後，研究対象施設の施設長10名から意見をもらい，項目の精選とカテゴリーの命名を行った．また，リスクアセスメント項目の文章を表現するにあたり，人の内面を探るものとして開発されている心理測定尺度,「自意識尺度日本語版（菅原，1984）」[23],「自己受容測定尺度（沢崎ら，1993）」[23],「他者意識尺度（辻，1993）」[24],「親の養育態度尺度（中道・中澤，2003）」[25],「無力感尺度（下坂，2001）」[25],「対人不安傾向尺度（松尾・新井，1998）」[25]の項目表現を参考とした。

以下に，子ども時代に虐待を受けた者の心理的特徴を整理する上で参考とした概念について述べる．

① アダルトチルドレン（Adult Children）

アダルトチルドレン（以下 AC）とは，機能不全家族（dysfunctional family）で育った者に共通する心理行動的特徴をまとめたものであり，大人になりきれない「インナーチャイルド」が心理的に存在しているという意味を象徴し，そのような特徴を持つ者を AC と命名したものである．ここで言う,機能不全家族とは,虐待（ドメスティックバイオレンスの目撃）等により健康な機能が損なわれた家族を示している．もともとは親がアルコール依存症でドメスティックバイオレンスがあるような家族を指していたが，現在はアルコール依存症のある家族の場合に限らず，健康な機能が損なわれた家族全般を指している．機能不全家族の中では，子どもは，いつ暴力が起こるか分からないという緊張と不安のために安心して生活できず，そのような経験が大人になってからの生きづらさや特徴的な心理・行動の形成に関連していると考えられている[15,16]．しかしながら，AC の心理特性を実証する研究は見当たらず，特定部分だけを故意的に取り上げているのではないかという疑問があったり，AC 以外の人々から明瞭に区分できるような指標がなかったりと，AC は概念としての不備が多い[17]．以上より，AC の心理特性は不十分な点はあるものの，子ども時代に虐待を受けた者の特徴を示しており,「虐待のリスクのある親」に気づく上で参考になると思われる．

② ドメスティックバイオレンス（Domestic Violence）

ドメスティックバイオレンス（以下 DV）と子ども虐待は共に家庭という密室の中で起きる暴力である．DV は強姦・児童期性虐待・セクシャルハラスメントなどと同様，男女の間にある不均衡な力関係からくる構造的な暴力のことである．その種類には身体的・心理的・性的暴力がある．これらは威嚇や強制，あるいは経済封鎖やストーキングなど，外部からは見えにくく認知されにくい

心理的暴力に加え，身体的・性的暴力を相乗的に用いることで，相手を支配し無力化させ，自尊心を奪う[17-19]．児童虐待防止法の2004年の改正で，子どもに心理的外傷を与えるものとして，心理的虐待として明確化されており[20]，このようなDV家庭に育った者の特徴が，「虐待のリスクのある者」の特徴を予測する上で参考になると思われる．

③ 複雑性PTSD

複雑性PTSDは，戦争などの公的状況における被害から児童虐待やDVなどの家庭内での私的状況における被害までを含む長期的反復的トラウマ体験による心的外傷ストレス障害である．対人関係の機能の多くの領域における慢性的な困難が特色であり，その症状としては，感情調整の障害，無力感，恥，希望のなさ，敵意，他者との関係の障害などがある[21]．虐待は支配・被支配という関係が存在することが多く，虐待の長期的影響として言われている複雑性PTSDの概念も有用と考えた．

本研究では，以上のような既存の概念等を参考に，虐待リスクのある親の心理的特徴をまとめ，これらを項目としてまとめた，独自の「リスクアセスメント項目リスト（58項目）を作成した．

２．３ 「虐待のリスクアセスメント項目リスト」の作成

前述したように，子ども時代に虐待を受けた者の心理的特徴と関連が深いACやDV，複雑性PTSD等の概念や文献を参考とし，項目リストを作成した．以下に，主なカテゴリーについて説明する．

① 見捨てられ不安

一般に虐待状況では，安定した関係性が少なく，過剰に干渉されたり無視されたりすることが多い．愛情を与えて欲しい時には与えてもらえず，いつ対応してもらえるか分からない状態が続くことで，親と子どもの間に支配・被支配という関係性が形成され，子どもは親の対応に左右されるようになる．親から見捨てられることは，乳児にとっては死を意味し，家庭という狭い世界の中で多くを生きている幼児や児童にとってはかなりの恐怖となる．その結果，子どもは【見捨てられ不安】を抱くようになる[5,28,29]．

② 悲観的予測／猜疑心／感情抑制

子どもは，自分の求めた対応が親から返ってくる経験が少ないため，物事に対する【悲観的予測】を発達させやすく，親以外の他者の言動に対しても【猜疑心】を抱きやすくなる．また，見捨てられないように自分の思いを極力抑えようと【感情抑制】してでも，親の機嫌を損ねないように振る舞うようになる．

③ 承認欲求／罪悪感・罪責感

子どもは，ほとんど認められなかった経験を積むことで逆に人に認められたいという【承認欲求】が強くなる．承認欲求が強いために，また親にとっての良い子の像を崩さないために，子どもは自分に対して高い目標を設定する．ただ，その目標は現実的でない目標の場合も多いため，達成できずに罪悪感を持ったり，目標を達成できなかった自分を責めたりと【罪悪感と罪責感】に苛まれることが多い[22,26,30]．

④ コントロール／責任転嫁と問題回避

子ども時代に体得した虐待状況への適応機制（適応行動やものの捉え方・考え方）は，成人後の社会生活上の生きづらさとなって表れ，対人関係においては，支配・被支配の関係性をとってしまいがちである[15]．自分が【他者へのコントロール】をしたり，逆に自分が【外部からのコントロール】を受けていると感じたり，実際にも支配される状況に陥りやすい．また，何か問題が起こった場合でも，今まで安定した状態でじっくりと問題を解決していく経験を積む機会に恵まれなかったため，【責任転嫁と問題回避】の傾向がみられ，思い通りにならないとイライラしたり怒りを周囲にぶつけたりする【自己コントロールの困難】もみられる[22,26]．

⑤ 極端さ

物事を白か黒かの二極で捉え，１つの行動にこだわり他の行動が可能であると考えないような【極端さ】もある[22,27]．これは，極端さゆえの視野狭窄だけでなく，中途半端な状態を嫌い，安定を求める心理が働くためと考えられている．

⑥ 非現実感

子どもまたはサバイバー（子ども時代の虐待環境を生き延びて大人になった人）は，現在の虐待状況の辛さや，成人後の生きづらさから逃げ出したいという心理が強くなっていき，【非現実感】を抱くこともある．ただ，これは解離やうつ傾向が強い状態であり疾患との区別がつきにくい[14]．

２．４ 調査方法

研究対象者は，勤務先の施設長の推薦を受けた虐待事例と関わった経験が豊富な専門家であった．調査手順として，回答者には一番新しい又は

鮮明に記憶に残っている心理的虐待を含む虐待問題を抱える親１名を想起してもらい，各項目（心理的特徴）がどの程度該当するかを回答してもらった（そう～違うの４段階）.「心理的虐待を含む」と条件付けしたのは，心理的虐待を行う親は過干渉であったり感情の起伏が激しかったりと心理的特徴が表現されやすいと考えたためである．さらに，どの虐待にも心理的虐待が伴うと言われ，全ての虐待の本質に心理的虐待がある[16]ということからも虐待状況を把握するためには心理的虐待に含まれる要素は必要不可欠であると考えた．また，親１名を想起してもらったのは，虐待事例となった個々人の心理的特徴を深く聴取するためである．また，複数の虐待事例を想起した場合には，虐待事例の心理的特徴の多様性が回答を困難にする可能性もあり，A さんには当てはまるが B さんには当てはまらない心理的特徴があった場合に回答は困難となり，複数の虐待事例を総括したイメージで回答してもらった場合には回答者の主観や印象に引っぱられた回答になると考えたためである．

もう１点，各項目を把握する時の気づきやすさについても回答してもらった（容易に気づく～気づけないの３段階）． 調査期間は 2006 年 8 月～12 月であった．

２．５　倫理的配慮

本研究は，石川県立看護大学倫理審査委員会の承認を得て実施した．倫理的配慮として，無記名回答によって個人が特定されないこと，研究参加は自由意志であること，回答を中断しても不利益は生じないこと等を研究者が施設代表者に直接説明し，承諾を得た上で研究対象者を選定してもらった．また，各研究対象者に対しても，施設代表者に説明した内容と同様の倫理的配慮を記載した同意書を同封し，調査用紙の返信をもって同意とした．返信に関しては，個別の返信用封筒を同封し，返信するかどうかを個人の意志で選択できるよう配慮した．

３．結果

３．１　回答者

児童相談所等の施設代表者から推薦を受けた 55 名に調査用紙を送付し，虐待事例の経験不足等を理由として回答を辞退した者がおり，34 名の回答が得られた（回収率 61.8%）．

① 属性（表 1）

表１　回答者の職種と勤務施設

		人数（%）
職種	社会福祉士	10(30.3)
	保健師	4(12.1)
	助産師	3(9.1)
	臨床心理士	3(9.1)
	保育士	3(9.1)
	医師	2(6.1)
	教師	1(3.0)
	その他	7(21.2)
勤務経験のある施設（のべ）	児童相談所	13(20.3)
	保健所	9(14.1)
	病院	9(14.1)
	保育所	6(9.4)
	知的障害者施設	4(6.3)
	助産院	3(4.7)
	電話相談所	3(4.7)
	福祉事務所	1(1.6)
	学校	1(1.6)
	その他	15(23.4)

回答者の年齢は 45.8 ± 8.34 歳（31 ～ 69 歳）であった．職種は，社会福祉士が 30.3%と一番多く，次いで保健師（12.1%），助産師（9.1%），心理士（9.1%），保育士（9.1%）の順であった．また，今までに所属してきた施設をみると児童相談所（20.3 %），保健所・市町村（14.1 %），病院（14.1%），保育所（9.4%）の順であり，これらの施設においての通算勤務年数は 16.5 ± 8.35 年（4 ～ 31 年）であった．

② 各項目が虐待事例の心理的特徴に当てはまるか

無回答の場合は，設問の意味するところが不明だった可能性が高く，回答できなかったものと解釈して総数から除外して回答率を計算した．

各項目の回答結果として「そう」と「ややそう」の割合が高かった項目を順番に挙げると，「1. 思い通りにならない状況にかなり不安になっている（87.1%）」,「2. まどろっこしい行動にイライラしている（86.7%）」,「3. 怒りを周囲にまき散らすことがある（84.4%）」,「4. 自分が正しいと考えていることを強要している（83.4%）」,「5. 自分だけを理解し心を寄せてくれる人を強く求めている（76.7 %）」,「6. 他者のせいにしがちである（76.7%）」,「7. ほどほどにするということができ

ない（75.0％）」,「8. 楽しむことができない（74.2％）」,「9. 被害者意識が強い（74.2％）」,「10. 他者と親密な関係を持ちにくい（73.3％）」,「11. なかなか人を信用することができない（71.0％）」であり，以上の項目が70％を超えていた．順次,「そう」と「ややそう」の回答割合の高い順にみていくと, 50％以上の項目は31項目であった（表2-1）.

逆に,「そう」と「ややそう」の回答割合が低い項目を順番に挙げると,「58. 相手のために自らを犠牲にしすぎる（9.7％）」,「57. あまり感情を出さない（12.9％）」,「56. 波風をたてないように四苦八苦している（13.0％）」,「55. 対立を極度に恐れたり避けている（17.2％）」,「54. いつも受け身的である（19.3％）」であり, 以上が20％を下回っていた（表2-2）.

③ 各項目を「虐待に関連する親の心理的特徴」として気づけるか（表3）

「そう」と「ややそう」の割合が50％以上であった31項目のうち,「容易に気づく」の回答割合が高かった項目を順番に挙げると,「3. 怒りを周囲にまき散らすことがある（50.0％）」,「13. 物事や他者を白か黒かの二極分化で決めたがる（48.5％）」,「9. 被害者意識が強い（43.8％）」,「6. 他者のせいにしがちである（42.4％）」であり，以上の項目が40％以上であった.

逆に,「気づけない」の回答割合が最も高かったのは,「30. 人生は自分以外の要因によって決まると思っている（43.8％）」であり,「14. 理想とほど遠い自分を許すことができない（36.4％）」,「27. 自分の感情が分からない（32.3％）」,「28. 自分自身に対して高い理想を持っている（27.3％）」,「18. 嫉妬深い（25.0％）」の順に高かった.

4．考察

4．1　項目選択

今回の調査では，無回答を総数から除外して回答率を計算し，各回答の「そう」と「ややそう」を合わせて過半数である50％を基準として項目を選定した．まず，無回答を除外して回答率を計算したことに関しては検討の余地があるが，この研究は今後，親に対して調査を行い，項目の精選を行う予定であるため，その段階で項目表現の修正と併せて項目の適切性も検討する予定である．また，項目の一致度の基準を「そう」と「ややそう」を合わせて50％以上を採用したことに関しては，項目としての心理的特徴が多様であり，回答のばらつきも予想されたため，専門家の過半数が項目内容と虐待事例の心理的特徴が一致していると回答した項目は，一定の妥当性があると考えた．さらに，回答時に虐待を行った親1例を想定して回答してもらったことで，実際に項目内容の心理的特徴をもった虐待事例が一定数存在していたことが言え，項目内容の妥当性の根拠となると考えた.

4．2　項目内容の傾向

回答結果から31項目とした．項目内容を概観すると【見捨てられ不安】,【猜疑心】,【感情抑制】,【承認欲求】,【罪悪感と罪責感】,【コントロール（自己・他者・外部）】,【責任転嫁と問題回避】,【極端さ】という心理的特徴があることが示唆された．また，項目の精選を通して，カテゴリー【悲観的予測】を構成する3項目と【非現実感】を構成する2項目が除外されたことから，最終的な項目リストは【悲観的予測】を抱くような精神疾患に近接するネガティブな状態ではなく，ましてや精神疾患が想定されるような【非現実感】を抱いている親ではない項目内容である可能性が示唆された.

実際に「そう」と「ややそう」の回答率が高かった項目は,「思い通りにならない状況にかなり不安になっている」,「まどろっこしい行動にイライラしている」,「怒りを周囲にまき散らすことがある」という感情の強い表出をあらわす内容が多く,「そう」と「ややそう」の回答率が2割を切るような項目は,「相手のために自らを犠牲にしすぎる」や「あまり感情を出さない」,「波風をたてないように四苦八苦している」という自己の葛藤や苦心をあらわすような内容であった．つまり，エネルギーの方向性が自己に向かうより，外部や他者に向きやすいという心理的特徴がある可能性は示唆される．しかし当然だが，専門家が捉えた虐待事例の心理的特徴であり，表出されないものは他者が察知しづらいということ，想定を1事例としたことでよりアクティブで印象に残っている親を思い浮かべた可能性もあるため，今後の親への調査を実施していく必要性がある.

4．3　臨地への活用と課題

本研究で検討した虐待に関連する親の心理的特徴項目リストは，虐待発生要因の中の親の要因に焦点を絞り掘り下げた項目のため，現場では，家庭・社会の環境要因，子どもの要因等の他の虐待

表 2-1　虐待事例との一致度（そう + ややそう）が 50％以上の項目（n=34）

人（%）

項目	n	そう	ややそう	やや違う	違う
1.思い通りにならない状況にかなり不安になっている	31	13(41.9)	14(45.2)	2(6.5)	2(6.5)
2.まどろっこしい行動にイライラしている	30	9(30.0)	17(56.7)	3(10.0)	1(3.3)
3.怒りを周囲にまき散らすことがある	32	14(43.8)	13(40.6)	3(9.4)	2(6.3)
4.自分が正しいと考えていることを強要している	30	11(36.7)	14(46.7)	4(13.3)	1(3.3)
5.自分だけを理解し心を寄せてくれる人を強く求めている	30	9(30.0)	14(46.7)	7(23.3)	0(0.0)
6.他者のせいにしがちである	30	9(30.0)	14(46.7)	7(23.3)	0(0.0)
7.ほどほどにするということができない	32	7(21.9)	17(53.1)	7(21.9)	1(3.1)
8.楽しむことができない	31	9(29.0)	14(45.2)	4(12.9)	4(12.9)
9.被害者意識が強い	31	11(35.5)	12(38.7)	6(19.4)	2(6.5)
10.他者と親密な関係を持ちにくい	30	9(30.0)	13(43.3)	8(26.7)	0(0.0)
11.なかなか人を信用することができない	31	8(25.8)	14(45.2)	8(25.8)	1(3.2)
12.偏頭痛等の心身症様の身体症状が多い	30	9(30.0)	11(36.7)	6(20.0)	4(13.3)
13.物事や他者を白か黒かの二極分化で決めたがる	29	5(17.2)	14(48.3)	8(27.6)	2(6.9)
14.理想とほど遠い自分を許すことができない	30	6(20.0)	13(43.3)	4(13.3)	7(23.3)
15.常に他者からの承認と賞賛を求めている	31	8(25.8)	11(35.5)	10(32.3)	2(6.5)
16.一つの行動にこだわり他の行動が可能であると考えない	28	4(14.3)	13(46.4)	9(32.1)	2(7.1)
17.他者にどう思われるかが重要だと思っている	32	6(18.8)	13(40.6)	10(31.3)	3(9.4)
18.嫉妬深い	27	5(18.5)	11(40.7)	10(37.0)	1(3.7)
19.他者に細かく指示している	31	5(16.1)	13(41.9)	11(35.5)	2(6.5)
20.常に他者を警戒している	31	5(16.1)	13(41.9)	10(32.3)	3(9.7)
21.問題の解決を後回しにしている	28	6(21.4)	10(35.7)	11(39.3)	1(3.6)
22.他者を盲目的に信じるか最初から疑っている	30	6(20.0)	11(36.7)	11(36.7)	2(6.7)
23.責任を負わなければならない状況を回避している	29	7(24.1)	9(31.0)	10(34.5)	3(10.3)
24.他者に頼ることができない	31	5(16.1)	12(38.7)	8(25.8)	6(19.4)
25.周囲の期待にそうように振る舞おうとしている	33	3(9.1)	15(45.5)	9(27.3)	6(18.2)
26.自分の気持ちや考えをなかなか打ち明けられない	30	5(16.7)	11(36.7)	10(33.3)	4(13.3)
27.自分の感情が分からない	29	7(24.1)	8(27.6)	13(44.8)	1(3.4)
28.自分自身に対して高い理想を持っている	31	6(19.4)	10(32.3)	13(41.9)	2(6.5)
29.相手の顔色をうかがっている	32	6(18.8)	10(31.3)	13(40.6)	3(9.4)
30.人生は自分以外の要因によって決まると思っている	28	5(17.9)	9(32.1)	14(50.0)	0(0.0)
31.他者に気を使い過ぎて疲れやすい	32	4(12.5)	12(37.5)	12(37.5)	4(12.5)

表 2-2　虐待事例との一致度（そう + ややそう）が 50％未満の項目（n=34）

人（%）

項目	n	そう	ややそう	やや違う	違う
32.自分の本当の思いを認めない(否認)	29	5(17.2)	9(31.0)	11(37.9)	4(13.8)
33.いつも自分のせいではないかと考えている	32	6(18.8)	9(28.1)	11(34.4)	6(18.8)
34.起こってもいないことをあれこれ心配する	30	7(23.3)	7(23.3)	14(46.7)	2(6.7)
35.常に指示してくれる人がいないと不安である	31	3(9.7)	11(35.5)	11(35.5)	6(19.4)
36.嫌われないよう自分のイメージに異常に気を配っている	32	5(15.6)	9(28.1)	14(43.8)	4(12.5)
37.何をやってもうまくできないと思っている	31	3(9.7)	10(32.3)	12(38.7)	6(19.4)
38.常に他者の気持ちや意向に気を配り過ぎる	32	2(6.3)	11(34.4)	11(34.4)	8(25.0)
39.自分の進む道を必ずしも自分で決めていない	31	4(12.9)	8(25.8)	14(45.2)	5(16.1)
40.責任を果たすことにこだわっている	31	5(16.1)	7(22.6)	14(45.2)	5(16.1)
41.表情、しぐさ、声等が話している内容と一致しない	30	3(10.0)	8(26.7)	14(46.7)	5(16.7)
42.理想論、ファンタジー(空想)にとらわれている	30	5(16.7)	6(20.0)	12(40.0)	7(23.3)
43.目標を決めてもめったに成功しないと思っている	31	0(0.0)	11(35.5)	15(48.4)	5(16.1)
44.特定の人を理想化している	26	3(11.5)	6(23.1)	12(46.2)	5(19.2)
45.言葉よりも非言語的なものを気にしている	30	3(10.0)	7(23.3)	15(50.0)	5(16.7)
46.人間的な関わりに貪欲である	30	1(3.3)	9(30.0)	14(46.7)	6(20.0)
47.罪の意識によくおそわれている	32	3(9.4)	7(21.9)	16(50.0)	6(18.8)
48.本当は気が進まないのにいやだと言えない	31	2(6.5)	7(22.6)	11(35.5)	11(35.5)
49.言葉を用心深く選んでいる	31	1(3.2)	8(25.8)	16(51.6)	6(19.4)
50.相手が腹を立てそうな行為をわざとすることがある	30	3(10.0)	5(16.7)	14(46.7)	8(26.7)
51.普通では耐えられないようなことを耐えてしまう	31	3(9.7)	5(16.1)	19(61.3)	4(12.9)
52.逸脱行動で自分に関心を集めようとしている	31	3(9.7)	4(12.9)	14(45.2)	10(32.3)
53.尊大で誇大的な考えを抱いている	29	2(6.9)	4(13.8)	16(55.2)	7(24.1)
54.いつも受け身的である	31	1(3.2)	5(16.1)	19(61.3)	6(19.4)
55.対立を極度に恐れたり避けている	29	2(6.9)	3(10.3)	14(48.3)	10(34.5)
56.波風をたてないように四苦八苦している	31	2(6.5)	2(6.5)	21(67.7)	6(19.4)
57.あまり感情を出さない	31	1(3.2)	3(9.7)	13(41.9)	14(45.2)
58.相手のために自らを犠牲にしすぎる	31	2(6.5)	1(3.2)	16(51.6)	12(38.7)

発生要因もアセスメントした上でより有効なアセスメントを実施していく必要がある．ただ，今まで熟練の専門家がもつ臨床知や経験知によって察知されていた虐待に陥る親の心理的特徴を言語化できた可能性があり，意義深い．虐待予防において，専門家はリスクのある親に気づいていくことが必要であるが，実際には専門家の知識・経験不足や虐待を認めたくないという心理，虐待の判断に確信がもてない等の理由があり，気づくことが難しい場合もある[3)]．それが，新人であればなおさらであるため，今回の研究で集約された項目を知識として頭に入れることで，虐待状況に対する意識向上を図ることにもつながる．このことが，新人のスキルアップの１つの方法となる．

留意すべきこととしては，本項目リストは虐待の１次予防に寄与できることを目的としており，一般の方々の中から支援の必要な家族を把握していく必要性から，多くの方に当てはまるような心理的特徴が項目内容となっていることである．つまり，感度が高く特異度が低いという特徴を有する項目リストであり，この「特異度が低い」ということを理解した上で解釈しなくてはならない．

表３　採用項目（31 項目）の気づきやすさ（n=34）

人（%）

項目	n	容易に気づく	何とか気づく	気づけない
3.怒りを周囲にまき散らすことがある	34	17(50.0)	16(47.1)	1(2.9)
13.物事や他者を白か黒かの二極分化で決めたがる	33	16(48.5)	14(42.4)	3(9.1)
9.被害者意識が強い	32	14(43.8)	16(50.0)	2(6.3)
6.他者のせいにしがちである	33	14(42.4)	16(48.5)	3(9.1)
19.他者に細かく指示している	33	13(39.4)	16(48.5)	4(12.1)
7.ほどほどにするということができない	33	13(39.4)	16(48.5)	4(12.1)
2.まどろっこしい行動にイライラしている	32	12(37.5)	17(53.1)	3(9.4)
12.偏頭痛等の心身症様の身体症状が多い	33	12(36.4)	15(45.5)	6(18.2)
4.自分が正しいと考えていることを強要している	33	12(36.4)	17(51.5)	4(12.1)
1.思い通りにならない状況にかなり不安になっている	33	11(33.3)	18(54.5)	4(12.1)
29.相手の顔色をうかがっている	33	11(33.3)	18(54.5)	4(12.1)
25.周囲の期待にそうように振る舞おうとしている	34	10(29.4)	22(64.7)	2(5.9)
31.他者に気を使い過ぎて疲れやすい	32	9(28.1)	19(59.4)	4(12.5)
15.常に他者からの承認と賞賛を求めている	32	8(25.0)	17(53.1)	7(21.9)
21.問題の解決を後回しにしている	32	8(25.0)	19(59.4)	5(15.6)
5.自分だけを理解し心を寄せてくれる人を強く求めている	32	8(25.0)	20(62.5)	4(12.5)
20.常に他者を警戒している	32	8(25.0)	23(71.9)	1(3.1)
10.他者と親密な関係を持ちにくい	33	8(24.2)	22(66.7)	3(9.1)
8.楽しむことができない	34	8(23.5)	23(67.6)	3(8.8)
27.自分の感情が分からない	31	7(22.6)	14(45.2)	10(32.3)
23.責任を負わなければならない状況を回避している	32	6(18.8)	19(59.4)	7(21.9)
28.自分自身に対して高い理想を持っている	33	6(18.2)	18(54.5)	9(27.3)
26.自分の気持ちや考えをなかなか打ち明けられない	33	6(18.2)	20(60.6)	7(21.1)
16.一つの行動にこだわり他の行動が可能であると考えない	32	5(15.6)	20(62.5)	7(21.9)
17.他者にどう思われるかが重要だと思っている	32	5(15.6)	22(68.8)	5(15.6)
11.なかなか人を信用することができない	33	5(15.2)	20(60.6)	8(24.2)
24.他者に頼ることができない	33	5(15.2)	22(66.7)	6(18.2)
22.他者を盲目的に信じるか最初から疑っている	29	4(13.8)	21(72.4)	4(13.8)
14.理想とほど遠い自分を許すことができない	33	4(12.1)	17(51.5)	12(36.4)
18.嫉妬深い	32	3(9.4)	21(65.6)	8(25.0)
30.人生は自分以外の要因によって決まると思っている	32	3(9.4)	15(46.9)	14(43.8)

表４　カテゴリーと削除項目

カテゴリー	採用項目	削除項目
見捨てられ不安	周囲の期待にそうように振る舞おうとしている 相手の顔色をうかがっている	嫌われないよう自分のイメージに異常に気を配っている 常に他者の気持ちや意向に気を配り過ぎる 言葉よりも非言語的なものを気にしている 本当は気が進まないのにいやだと言えない 言葉を用心深く選んでいる 相手が腹を立てそうな行為をわざとすることがある 対立を極度に恐れたり避けている
悲観的予測		起こってもいないことをあれこれ心配する 何をやってもうまくできないと思っている 目標を決めてもめったに成功しないと思っている
猜疑心	他者と親密な関係を持ちにくい なかなか人を信用することができない 常に他者を警戒している 他者に頼ることができない 自分の気持ちや考えをなかなか打ち明けられない	
感情抑制	楽しむことができない 他者にどう思われるかが重要だと思っている 自分の感情が分からない	表情、しぐさ、声等が話している内容と一致しない あまり感情を出さない
承認欲求	自分だけを理解し心を寄せてくれる人を強く求めている 常に他者からの承認と賞賛を求めている 嫉妬深い 他者に気を使い過ぎて疲れやすい	常に指示してくれる人がいないと不安である 特定の人を理想化している 逸脱行動で自分に関心を集めようとしている 人間的な関わりに貪欲である
罪悪感と罪責感	偏頭痛等の心身症様の身体症状が多い 理想とほど遠い自分を許すことができない	いつも自分のせいではないかと考えている 罪の意識によくおそわれている
他者へのコントロール	自分が正しいと考えていることを強要している 他者に細かく指示している	
外部からのコントロール	人生は自分以外の要因によって決まると思っている	自分の進む道を必ずしも自分で決めていない いつも受け身的である
責任転嫁と問題回避	他者のせいにしがちである 被害者意識が強い 問題の解決を後回しにしている 責任を負わなければならない状況を回避している	自分の本当の思いを認めない(否認)
自己コントロールの困難	思い通りにならない状況にかなり不安になっている まどろっこしい行動にイライラしている 怒りを周囲にまき散らすことがある 自分自身に対して高い理想を持っている	
極端さ	ほどほどにするということができない 物事や他者を白か黒かの二極分化で決めたがる 1 つの行動に拘り他の行動が可能であると考えない 他者を盲目的に信じるか最初から疑っている	責任を果たすことにこだわっている 普通では耐えられないようなことを耐えてしまう 波風をたてないように四苦八苦している 相手のために自らを犠牲にしすぎる
非現実感		理想論、ファンタジー(空想)にとらわれている 尊大で誇大的な考えを抱いている

表５　採用項目

カテゴリー	採用項目
猜疑心	他者と親密な関係を持ちにくい
	なかなか人を信用することができない
	常に他者を警戒している
	他者に頼ることができない
	自分の気持ちや考えをなかなか打ち明けられない
極端さ	ほどほどにするということができない
	物事や他者を白か黒かの二極分化で決めたがる
	一つの行動にこだわり他の行動が可能であると考えない
	他者を盲目的に信じるか最初から疑っている
自己コントロールの困難	思い通りにならない状況にかなり不安になっている
	まどろっこしい行動にイライラしている
	怒りを周囲にまき散らすことがある
	自分自身に対して高い理想を持っている
承認欲求	自分だけを理解し心を寄せてくれる人を強く求めている
	常に他者からの承認と賞賛を求めている
	嫉妬深い
	他者に気を使い過ぎて疲れやすい
責任転嫁と問題回避	他者のせいにしがちである
	被害者意識が強い
	問題の解決を後回しにしている
	責任を負わなければならない状況を回避している
感情抑制	楽しむことができない
	他者にどう思われるかが重要だと思っている
	自分の感情が分からない
見捨てられ不安	周囲の期待にそうように振る舞おうとしている
	相手の顔色をうかがっている
罪悪感と罪責感	偏頭痛等の心身症様の身体症状が多い
	理想とほど遠い自分を許すことができない
他者へのコントロール	自分が正しいと考えていることを強要している
	他者に細かく指示している
外部からのコントロール	人生は自分以外の要因によって決まると思っている

よって，現時点では本リストの項目を点数化し，何点以上であれば虐待リスクが高いと結論づける使用方法ではなく，あくまで専門家（特に新人）の虐待予防に関する知識向上やアセスメント能力の向上という点において寄与できる．

４．４　研究における今後の課題

今回は，虐待に関連する親の心理的特徴について項目リストを作成し，専門家から意見をもらうことでその内容の妥当性を検討した．今後は親を対象として調査を行い，因子分析等による信頼性・妥当性の検討を行い，更なる項目の精選を行っていく必要がある．

５．結語

虐待のリスクアセスメント項目リストとして，虐待事例と関わる専門家に調査を実施し，項目内容の妥当性の側面から検討し，31 項目に集約した．

利益相反

なし

謝辞

本研究にご協力くださいました各施設長の方々，専門家の方々に御礼申し上げます．また，本研究に際して，様々なご指導をくださいました石川県立看護大学の西村真実子先生に深謝致します．なお，本研究は 2007 年の石川県立看護大学大学院修士論文（心理的虐待のリスクアセスメント項目の内容妥当性の検討）を加筆修正したものである．

引用文献

1) Bowlby J：Attachment and loss. Basic Books, New York, 361, 1980.
2) 厚生労働省：子ども虐待対応の手引き（第1章 子ども虐待の援助に関する基本事項）. http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv12/01.html (accessed 2017/6/7)
3) 斉藤学：特別企画－依存と虐待①[PART1]共依存とはなにか　共依存とみえない虐待．こころの科学，59，16-21，1995.

4)丸山恭子：保健師さん児童虐待を見逃さないで！②虐待が“見えない”という現象．保健婦雑誌，59，2，168-172，2003.
5)第五回学術集会(栃木大会)特集　教育プログラム：虐待の早期発見と初期対応，上出弘之，家常恵，坂井聖二他．子どもの虐待とネグレクト，2(1)，22-32，2000.
6)社会福祉法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家族総合研究所編：厚生省子ども虐待対応の手引き　平成12年11月改定版，有斐閣(YUHIKAKU)，73，2001.
7)花田裕子，小西美智子：母親の養育態度における潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙の信頼性と妥当性の検討．広島大学保健ジャーナル，3(1)，55-61，2003.
8)福田直子，大津由紀，恒成茂行：子どもの虐待防止のためのリスクアセスメント票の開発．子どもの虐待とネグレクト，7(2)，238-251，2005.
9)荒木暁子，兼松百合子，横沢せい子，他3名：育児ストレスショートフォームの開発に関する研究．小児保健研究，64(3)，408-416，2005.
10)渡辺純，桜井秀雄，広利吉治，他2名：親の養育態度と子どもの発達(Ⅱ)－HRSHおよびMSによる因子分析的研究－．心身医学，32(6)，463-470，1992.
11)川崎裕美，海原康孝，小坂忍，他2名：母親の育児不安と家族機能に対する感じ方との関連性の検討，小児保健研究，64(6)，667-673，2004.
12)三上邦彦，山中亮，久保順也：ネグレクトのアセスメントスケール作成の試み．子どもの虐待とネグレクト，6(1)，70-77，2004.
13)畠山由佳子：宝塚市虐待防止ネットワーク会議における在宅支援モニタリングツール開発の試み－リスクアセスメント指標を中心に－．子どもの虐待とネグレクト，6(1)，23-32，2004.
14)坂井聖二：子ども虐待の背景とメカニズム．小児内科，34(9)，1345-1354，2002.
15)信田さよ子：子ども虐待へのアプローチ．教育學研究，68(3)，286-295，2001.
16)斉藤学：トラウマとアダルト・チルドレン．現代のエスプリ，358，49，1997.
17)平川和子：ドメスティックバイオレンスと子ども虐待．子どもの虐待とネグレクト，2(1)，130-136，2000.
18)誉田貴子，友田尋子，坂なつこ，他1名：DV(ドメスティック・バイオレンス)被害の実態と子どもへの影響に関する調査研究　－DV被害者とその子どもへの暴力内容と心身への影響－，大阪市立大学看護短期大学部紀要，3，27-35，2001.
19)吉田博美，小西聖子，影山隆之，他1名：ドメスティック・バイオレンス被害者における精神疾患の実態と被害体験の及ぼす影響．トラウマティック・ストレス，3(1)，83-89，2005.
20)岡田尊司：愛着障害－子ども時代を引きずる人々－．光文社新書，44-45，2016.
21)柳川敏彦：子ども虐待防止の現状．和歌山県立医科大学保健看護学部紀要，1，11-22，2005.
22)第五回学術集会(栃木大会)特集　大会企画シンポジウム，宮本信也，斎藤謁，杉山登志郎：虐待が子どものこころに与える影響．子どもの虐待とネグレクト，2(1)，33-41，2000.
23)堀洋道，山本真理子：心理測定尺度集Ⅰ－人間の内面を探る<自己・個人内過程>，2001.
24)堀洋道，吉田富二雄：心理測定尺度集Ⅱ－人間と社会のつながりをとらえる<対人関係・価値観>，2001.
25)堀洋道，櫻井茂男，松井豊：心理測定尺度集Ⅳ－子どもの発達を支える<対人関係・適応>，2007.
26)鈴木敦子：児童虐待における家族ケア－強迫観念の強い親と未熟な親への初期ケアに焦点を当てて－．小児看護，24(13)，1782-1785，2001.
27) 柳川敏彦：子どもの虐待防止の現状．和歌山県立医科大学保健看護学部紀要，1，11-17，2005.
28)瀬戸山恵美子，宇佐見悦子，遠藤ゆり絵：思春期患者が「安心感」を得るための援助－幼少の頃より母親と分離状態にあった患者を通して－．日本看護学会論文集 小児看護，32，3-5，2001.
29)田村和子，井上果子：青年期における境界例心性と養育態度の関連について．こころの健康，20(2)，73-87，2005.
30)大沼珠美，桑名佳代子，桑名行雄：乳幼児をもつ母親および父親が体験する育児困難と育児支援サービスへの要望．宮城大学看護学部紀要，6(1)，83-97，2003.

Investigation of the items for a child abuse risk assessment checklist focusing on psychological characteristics of the parent

Takahiro TERAI

Abstract

Child abuse is a serious problem, and it is necessary for healthcare providers to quickly discover a parent needing support, for which a risk assessment checklist is useful.

Therefore, we created an abuse risk assessment checklist that itemized the psychological characteristics of the parent. The items were made in reference to the psychological characteristics that a parent likely to abuse presented, as previously reported. We investigated the validity of the list items with experts who worked in child consultation centers, focusing on to what extent the content of the items accords with abuse cases, and whether the psychological characteristics on the list can be recognized by the experts through minimal involvement with a potentially abusive parent. The items were summarized into a 31-point checklist, and the experts' evaluations suggested that the list we created was proven to show the psychological characteristics of abusive parents.

Keywords　parents, abuse, psychological characteristic, item list, expert